

(Japanese Academy of Learning Disabilities)

## 日本LD学会会報

第9号



事務局：東京学芸大学心理学研究室内 〒184 東京都小金井市貫井北町4-1-1  
TEL&FAX. 0423-27-2890



## M君を思う

名古屋女子大学教授

宮 脇 修

「障害だけが見えて、障害をになった子どもが見えない」という警句がある。

知能が正常であるのかかわらず、国語とか算数のある部面で著しい落ちこみのある子どもの場合、いつのまにか社会的不適応の子になっていることがよくある。

私が知っている小学4年生のM君は、このあいだもクラスの中で、大騒ぎを演じて級友からひんしゆくを買ってしまった。

ちょっとしたことが原因でかとなり、級友の図画工作の作品を手当たりしだい破ってしまったというのである。

これまで、何かにつけて問題行動をひきおこすので、教室ではいわゆる「札付」の子どもになっており、担任の先生も「どのように指導してよいのかわからない子だ」と頭をかかえられている。

こういう場合、「この子はLDの子だから、LDの特徴をよくつかんで指導する必要がある」と話し合ったとしても、M君への処遇が好転していくとは思えない。

むしろ、障害だけが意識化され、その出来なさの面に目が注がれて、M君の全体像が見えにくくなるおそれもある。

LDという障害をになっているM君の、かけがえのない人間存在を意識し、なかまの一人としてクラスの子も達とともに歩んでいく心の余裕が、この場合の教師に望まれる。学校というところは、人間を肯定的に見る「人間への讃歌」が基底になるものであって、M君の、まずは“よいところ探し”から出発すべきであろう。

どんな人間でも、“出来なさ”ばかりに目をむけられていたら、やる気を失ってしまう。

《いま、ここに》このように投げ出されているM君の、問題行動の奥に潜む「M君のねがい」を受容できる雰囲気してほしい。

そして、教師や級友による、M君の人間らしい“あえぎ”に、愛と決意を内在させた観察の眼が望まれる。そういう中で、M君の興味局限の世界を理解しつつ、彼の行動を調整していく対処が創造できるような気がする。